

小学校 ESD (第3学年)

校歌から私たちの町をたんけん・はっけん・ほっとけん！  
～ その名もゆかしわが平城 ～

奈良市立平城小学校 新宮 済

1 単元名 校歌の私たちの町をたんけん・はっけん・ほっとけん！  
～ その名もゆかしわが平城 ～

2 単元目標

- ・地域の調べ学習から平城地域は、地域の人が後世へと守り伝えてきたものが多くあることや、未来に伝えていきたい地域の良さがたくさんあることがわかる。 【知識・技能】
- ・地域の調べ学習から、発見した地域の良さや、自分が未来に伝えたい地域の良さを説明することができる。 【思考・判断・表現】
- ・地域の調べ学習から発見した地域の良さを、地域の人との交流を通してさらに興味を持ち、もっと地域の良さを知ろうとする。 【学習に取り組む態度】

3 評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
地域の調べ学習から平城地域は、地域の人が後世へと守り伝えてきたものが多くあることや、未来に伝えていきたい地域の良さがたくさんあることがわかる。	地域の調べ学習から、発見した地域の良さや、自分が未来に伝えたい地域の良さを説明することができる。	地域の調べ学習から発見した地域の良さを、地域の人との交流を通してさらに興味を持ち、もっと地域の良さを知ろうとする。

4 教材について

本単元では、子どもたちが平城小学校の校歌の意味を知るために地域を探検し、人・モノ・コトと出会い、地域の良さを発見し、地域の方や家族に伝え交流することで、平城地域を大切にすることを育てる学習である。

子どもたちが学習する平城地域は歴史深い地域である。もとは平城京の北部に位置し、地域にある平城山は奈良時代の都の入り口であった。かつて都の運河として使用された秋篠川の近くには、奈良時代に建立された秋篠寺があり、伎芸天を見に観光客が地域の歴史街道を歩いて来る。住宅地の中には国立博物館に所蔵されている銅鐸が出土した遺跡があったり、小高い丘には古墳や歴代天皇陵が多数に点在している。このような歴史を残す地域であるが、50年ほど前までは、住宅がほとんどなく、秋篠川やため池などを利用した田園地帯と小さな森が一面に広がっていた。地域の小学校は平城小だけであったが、ここ50年で急速に宅地開発が進み平城小に児童が集中したため、地域内に多数の小学校が新設され校区が縮小した。現在では大型店舗や住宅地が増えて、平城地域は歴史の名残を残しながらも旧村・新興住宅

地・集合住宅・大型店舗・競輪場・私立高校・大学などが混在するようになった。

平城地域を学習するために、平城小の校歌を教材化した。その理由は二つある。一つ目は、校歌を調べることで地域の良さに出会えると考えたからである。先に述べたように、平城地域には歴史的に価値のあるものが多数ありながらも、時代の変遷とともに次第にその様相も変わり、農業用地へと変わっていった。かつての都の面影が失われつつある地域となった。しかしながら平城村史によれば1889年の明治市町村制度施行の際、「この地域の名前を平城村とし、平城京の復興に貢献した」と平城村史に書かれている。(平城村史 1971)これについて、当時はまだ平城宮跡の保存などが進められていなかった時代に、平城京の名称を懐かしみ村名として復興したことが地域の誇りとなっていると、地域の人が語っている。地域にあった平城京を復興しようと願う村民の想いは、今となっては地域のほとんどが知らないかもしれない。しかしながら、子どもたちは、自分が神社の氏子であることを知っていたり、毎年お寺の行事に参加していたり、お地蔵さまに手を合わせるなどしている。地域の数々の文化財やお祭りなどの行事が子どもたちに大切に語りつがれている。つまり平城地域には遺産を守り、愛し、伝えていこうとする想いが脈々と受け継がれている。このことが地域の良さの一つと考える。校歌の歌詞「その昔よりゆかし里」を調べることによって、地域の人々と出会い話を聞くなかで地域遺産を守り伝える人の営みを感じ取れないかと考えた。

二つ目は、追究のエネルギーとなる学習問題を作り出すことができる考えたからだ。平城小校歌には「ゆかし」という言葉が使われる。辞書では「なつかしい」「心がひかれる」という意味が出てくる。地域の人の聞き取りを通して「なつかしい」という言葉を校歌に当てはめ、平城地域はなつかしい里とした。この地域に育って「なつかしい」という生活経験がなく過ごしていた子どもたちにとって揺さぶりとなり、なぜこの地域は「なつかしい里なのか」という疑問が生まれた。インパクトある教材との出会いを作ることは、活発な疑問や気付きを生み出し、そこから追究のエネルギーとなる学習問題へと醸成できると考えた。

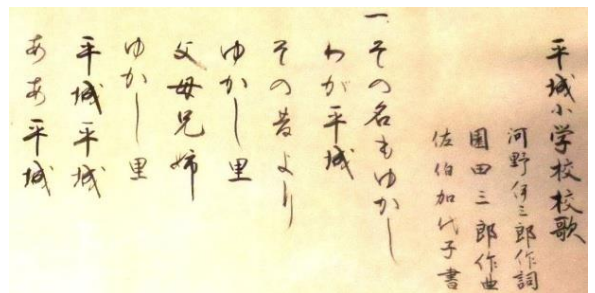


写真1 平城小学校校歌

## 5 指導について

校歌の歌詞から地域の良さを追究し続けるような展開を工夫した。一学期では校歌の歌詞「その昔よりゆかし里」に注目して、「平城小学校校区(里)のゆかしスポット探し」を社会科の校区探検と並行して調べさせた。校区探検後に、子どもたちが調べたいと考えるものを出し合うなかで、子どもたちの多くが興味を持ったものの中から追究のモデルとして一つを選び全体で調べることにした。また調べたことについて、地域の郷土史家に評価していただく機会を設けた。郷土史家の方には、調べを褒めてもらうだけでなく、調べた昔のものが今もあるのは平城地域の人が守ってきたからであり、他にも平城地域にはまだまだたくさん守り伝えられてきたものがあることを子どもに話してもらった。すると「地域の人が守り伝えてきたものをもっと見つけたい」という興味が湧き、家庭学習を利用して個人で調べ、それを教室で発表し合う学習が意欲的に進められた。

二学期は「その名もゆかしわが平城」に注目させるために、万葉集の中で「奈良」を歌った「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふが如く 今盛りなり」を取り上げた。まず、この歌が1300年前の

平城地域のことを懐かしんで歌った和歌であることを説明した。次に和歌の言葉に注目させると「ならの都」とは家族でよく遊びに行く平城宮跡であることに気づいた。奈良県立万葉文化館から協力していただき和歌の解説漫画」を提示すると、昔この地域にあった奈良の都の生活に興味を持った。そこで「昔この地域にあった平城京の人々の暮らし」を調べるために校外学習で平城宮跡に行き、グループに分かれて探検することにした。そこで発見したことをまとめて奈良文化財研究所の方に評価してもらった。ここでも一学期と同じように「平城宮跡は、地域の人が守り伝えてきたこと、他にも平城地域には人が守り伝えてきたものがたくさんある」ことを教えてもらい地域への興味をさら深め、再び個人で調べる学習につなげることができた。

三学期は校歌の歌詞「父母兄姉ゆかし里」に注目して、家族にとっても平城地域はなつかしい里なのかをインタビューした。これまでの追究が遠い昔のものに視点を当てていたので、子どもの中からは、「私の家は最近引っ越してきたから無いかもしいない」という声が出ていた。しかしインタビューしてみると、予想とは異なり平城地域に移り住んできたどの家族にも人・モノ・コトへの思い出があり、なつかしい里として大切にしていることを知った。子どもたちは「校歌から見つけた地域の平城地域のゆかしなところを地域の人に発表したい」という思いが強くなり、地域の人を招待して発表会をした。地域の人には子どもたちの考えに共感してもらった。さらに地域の人が考えるゆかしなところも紹介してもらった。すると子どもの中から「ぼくたちにとって地域のゆかしなところってあるのかな」という疑問が出てきた。



「自分たちが大切にしたいと思うゆかしなところを見つけたい」という意見が出たので、これを次の学習問題とした。「自分たちが大切にしたいと思うゆかしなところを見つけたい」という意見が出た。見つけたものを紹介しやすいよう廊下に「平城地域のよいことマップ」をつくり、子どもたちが見つけた地域の良さを、人、モノ、コトの色ごとに分けたカードを張ってまとめた。これをもとに参観で成果発表会をし、お家の方にも地域のよいところを紹介してもらった。完成したこのマップを NHK の番組を通じて全国の子どもたちに、校歌から見つけた平城のよいところを発信するために投稿した。最後に卒業を控えた六年生に校歌に歌われている地域のよいところと、そのようなことに出会わせてくれる校歌が地域の方から愛されていることを伝え、校歌のもつ意味をかみしめながら共に歌った。この活動から ESD の観点の「未来へつなげることを考えることで持続可能な社会を目指す責任性」が養われると考えられる。

## 6 ESD の観点

- ・責任性 …… 未来へつなげることを考えることで持続可能な社会を目指す責任性が養われると考えられる。

7 単元計画

	学習内容	●留意点 ・児童の反応	
1 学 期	<p>○校歌の歌詞について疑問を持つ。</p>  <p>○学習問題を作る。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>なぜ平城地域は「ゆかし里」なのだろう</p> </div> <p>○校歌の「ゆかし里」について調べるために平城地域を探検する。</p>  <p>○校歌に関する「ゆかしスポット」を調べる。</p> <p>○調べたことを地域の郷土史家に発表して評価をもらう。</p> <p>○自分が興味をもったゆかしスポットを調べてみる。</p> <p>○学んだことを家族に伝える。</p>	<p>●校歌の歌詞に注目すると意味がわからない言葉があり、その事実をお互いに共有させる。</p> <p>●校歌の歌詞に何度も使われている「ゆかし」という言葉に注目させる。</p> <p>●「ゆかしい」の意味を国語辞書で調べさせる。</p> <p>●社会の校区探検の時に、校歌に関係するだろう「ゆかしスポット」を見つけておく。</p> <p>●クラスで決めた「ゆかしスポット」の一つゴサシ古墳について詳しく調べて、地域に住む橿原考古学研究所の方に発表する。</p>  <p>・古墳だけじゃなく平城地域には人が壊さずに守り伝えてきたものがあるらしい、調べてみよう。</p>	ア
2 学 期	<p>○万葉集から平城京について興味を持つ。</p> <p>○平城京の生活を知るために、平城宮跡を探検する。</p> 	<p>●1300年前の平城地域のことを懐かしんで歌った和歌であることを説明し、「ならの都」の歌詞に注目させる。</p> <p>・奈良の都って平城京のことか！</p> <p>●博物館や大極殿を見学しながら、「平城京の生活は〇〇だった」というカードをつくる。</p>	イ  ア

	<p>○調べたことを加藤室長に発表して評価をもらう。</p>  <p>○学んだことを文章にまとめて家族に伝える。</p>	<p>●グループごとに「平城京の生活は○○」だったのカードを奈良文化財研究所研究所の方に発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平城宮跡だけではなく、平城地域にはが壊さずに守りつないできたものがたくさんあるのか、探してみたいな。</li> </ul>	
<p>3 学 期</p>	<p>○校歌の「父母兄姉ゆかし里」について調べるために家族にインタビューをする。</p> <p>○地域の方に学習問題の答えを発表し評価をしてもらう。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>大切にしたいと思う「ゆかし」なところを見つけよう</p> </div> <p>○平城地域のいいところマップをつくる。</p> <p>○学習参観で地域のいいところを発表し評価をもらう。</p> <p>○6年生に地域の思いを伝える。</p>	<p>●予想した答えを家族にインタビューして何がゆかしさを調べさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平城小の地域はなつかしい思い出がいっぱいだ。</li> </ul>  <p>●平城地域のすばらしいところを調べいいところカードに集める。</p>	<p>ウ</p>

## 8. 成果・課題

授業を終えた子どもたちにアンケートをとった。実践をはじめる前にとったアンケートでは、自分たちの地域の良いところについて質問すると、ほとんどが公園や学校と書いた。なかには考えられない子どももいた。実践後に同じ質問をすると、子どもたちは良いところをたくさん書きあげた。一斉授業でモデルとして調べた古墳や平城宮跡だけでなく、自分たちが個人で調べた地域の人・モノ・コトがたくさん出てきた。また実践前のアンケート調査では選んだ理由が一文程度であったが、実践後には、「昔から地域の人が守り伝えてきた」「大好きな景色だから」「ぼくらの安全を守ってくれるから」など子どもたちが、理由を付けて説明できるようになった。また学習のふりかえりでは、「良いところマップを作っているうちに、地域の良いところが毎日増えてきてうれしかった。」「こんなに平城地域には良いところがあるなんて驚いた。良いところを見つけることが楽しい。」「A君が紹介してくれた夕日を見にお母さんと行ってみたい。」などと子どもが書いたことから、地域愛の高まりを感じることができる。学校アンケートではほとんどの子どもが地域を大好きと答えたことも成果としてあげることができる。学習参観の成果発表会や地域での発表、六年生への発表後の意見交流では、「私も知らないような場所を子どもが調べて地域の良いところを選んでいて驚いた。今度一緒に行ってみたい。」「子どもたちがこんなに頑張っているのだから、もっと地域を勉強したい。」「3年生みたいに、地域をたくさん知って校歌を歌いたい」という

ような言葉が出た。子どもたちが地域に興味を持つだけでなく、いろいろな場で発信したことで周りの大人にまで地域への興味が広まっていったのである。日記などでは、お家の方と一緒に地域の良いところをさらに詳しく調べたり、家族旅行では他の地域の良いところを見つけようとするなど、子どもたちが未来に伝えたい地域の人・モノ・コトに注目して考えることができるようになったと考える。

この実践は、地域の郷土史家であり、奈良県立橿原考古学研究所の山田氏に年間通じて授業づくりに関わってもらった。かつて実践者も地域の文化財に関わる仕事に関わっていたが、地域の先人が残した文化財や、地域の素晴らしいものに関心の薄い地元の大人を、こちらに振り向かせることは至難の技であった。奈良県のように優れた文化財が多くある地域でも、大人にとっては文化財が在ることが当たり前で、わざわざ見に行こうとはしない現状があった。平城地域においてもなかなか地域の良いところに興味持たない実態であったが、子どもの発信は、大人をも動かす興味づけになり、少なからず地域社会への影響を与えたと考えられる。



## 9. 考察

成果を踏まえて考察では三つのことを取り上げる。一つ目は調べ学習を効果的にするための仲間同志のやりとりについてである。本実践について ESD セミナー指導案検討会では、古墳や平城京について人々が守り伝えてきたことを調べることは指導内容として難しいかもしれないという指摘をいただいた。

そこに調べ学習の工夫が求められていた。対策として、地域の歴史に詳しいゲストティーチャーから子ども向けに易しい資料をもらい、この資料をもとにグループで話し合い、まとめたものをグループ発表をし、これを評価してもらう場を設けた。評価してもらう時に、調べてきた場所は地域の人が守り伝えてきたことをキーワードとして付け加えてもらった。その結果、地域の人が守り伝えてきたということを構造化した知識として理解することができた。ゲストティーチャーの評価を、自分の調べたノートに付け加えている子どもの姿をつくることもできた。調べた内容も高い水準に到達することができた子どももいた。これは教育心理学者の波多野誼余夫・稲垣佳世子(2016)の教育理論から説明できる。波多野・稲垣の研究によると、集団討論をすると知的興味が高まる。さらに、討論を経た後で実験を観察した場合は、ただ単に実験を観察しただけの場合に比べて、深く学ぶことが多いと紹介されている。これを本実践の場合に当てはめると、集団討論としてグループで調べて発表する内容を定める活動、実験としてをゲストティーチャーへ発表し評価をもらう活動とすることができる。つまり、調べる活動において、仲間同志のやりとりが、知的好奇心を高め、より深い理解を助け、子どもを有能な学び手にするのであるということが考えられる。

二つめは、対話の機会を増やしたことが「地域の人が守り伝えてきた」「平城地域は良いものがある地域」という知識の構造化につながったことである。本実践では学習問題を解決するために、子ども、教師、地域の郷土史家、様々な地域の方、保護者、六年生と対話する活動を何度も設けた。対話の効用にあるように、児童は人に説明することを通じて理解を深めていった。教育学者の佐伯胖(1975)は、学びには「一貫性」と「開放性」が重要であるという。学びのなかで見つけていく「一貫性」を閉じたものにしないために、私たちはお互いの対話で一貫性をわかちあうように努め「開放性」を持たせていく必要がある。これにより学びにひろがりが高まりがもたされると述べている。発達心理学者の今井むつみ(2017)の「知識のドネル・ケバブ・モデル」的知識偏重のような、知識を断片的事実として教えてもらうことでは生きた知識は生まれにくいという考えにあるように、対話こそが生きた知識を生むのである。佐伯の、その人の学びをほうっておいても問いと対話によって「一貫性のひろがりが高まり」がどんどんと進んでいくこと、今井の、探究エピステモロジー（知識についての認識）を持つ探求人が熟達していく上で大事なこととして、誤った知識を修正し、それとともにスキーマを修正していくこと、の両者から対話による学びがこの授業で生まれたといえる。

三つ目は導入の工夫による追究の意欲付けである。教育心理学者の波多野誼余夫・稲垣佳世子(2016)によると、予想に反し思ったようにならなかつたとか、予期したこととまったく異なることが生じると、「あれ？」という感情をひき起こし、さらにそれについて調べてみたり、考えてみたりするような動機づけが起こると述べている。また既有知識が豊かで、よく確立しているほど、その分野について理解しておくのが重要だと思うほど驚きも強く、その結果、もっと調べたり、考えたりしようとする動機づけも強いという。そして、実際に活動に従事することによって、その事象について前よりも深く理解する（学ぶ）と述べている。つまり、本実践にあてはめると、9年近く住んでいる地域について「ぼくらの地域はなつかしい」という生活概念がなかった子どもたちにとって、校歌では「平城地域はなつかしい里」と歌われているという意外な事実への驚きが追究の意欲となり、学習問題として主体的に解決していくことで、地域がさらに身近なものとなっていった。波多野誼余夫の言う深い学びにつながったのだろうと考える。

《参考文献》

波多野誼余夫・稲垣佳世子（2016）『人はいかに学ぶか』中央公論新社

佐伯胖(1975)、『「学び」の構造』東洋館出版社

今井むつみ(2017)『学びとは何か』 岩波新書